ガーディアン

タクト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ガーディアン

【Ｎコード】
Ｎ２２５６Ｄ

【作者名】
タクト

【あらすじ】
ガーディアン。それは自然の力を操る種族。中学生の亮と海は自らをガーディアンと名乗る青年に出会う。彼らの運命はそこで狂い始めるのだった・・・

第1話：究極の食物

自然と一体になれ・・・・・
大地を踏み、風を感じろ
志は空より高く、その真意は海より深い
草のざわめき、炎の轟き
全ての答えは自然の中にある
自然と一体になれ・・・・・

亮は今日も塾帰りにコンビニへ寄っていた。サイズがギリギリでキツいジーンズのポケットに手を突っ込むと１５０円があった。親からはジュースを買えともらった金だが、こんな寒い日にジュースなど飲めるはずが無かった。そして彼は「ホット」が大嫌いだった。コンビニへ寄った理由はただ一つ。甘いものが大好きな亮の欲求を満たしてくれる物、板チョコ。薄い物体の中に凝縮されたカカオとミルクの絶妙なバランスに引き付けられたのはいつ頃からだろうか。去年の小学６年からだったような気がする。とにかく週に２回の塾帰りの日には板チョコをほうばらなければ生きていけない。無駄の無いフットワークでお菓子コーナーの下段にひっそりと置かれてあった板チョコを取り、わずか２歩でレジの前へ。店員がその動きに見とれているのかどうかは知らないが、言葉を詰まらせながら
「ひゃ・・・・１００円です・・・・」
と言った。亮の胸が高鳴り、１００円玉をポケットから出したそのとき、彼はやってしまった。やってはいけないことをやってしまった。カランカランという音が商品棚の下にあるスペースに呑まれて消え、亮の手にはさっきまであったはずの１００円玉はなかった。シーンと静まり返ったコンビニ内には衝撃で変な体勢になった亮と、彼の体勢にどう対応していいか分からないまま硬直している店員の姿があった。そのとき、まるで救世主が来たかのようなメロディと

共に自動ドアが開く。
「おい、何やってんだよ？」
その救世主の正体は同じ中学1年の海。バリバリのジャニーズ系で、頭がいい。この前の中間テストだって、５００点満点中４９５点という史上最強の得点をたたき出したのだ。・・・・・・そのときの亮は１９０点だったが・・・・・・・
海は瞬時にその状況を理解し、レジの上に１００円玉を置いた。店員は「助かったよ」という顔で１００円を受け取り、板チョコを海に渡した。それを見た亮はやっと動き出し、海の肩を軽く二回たたいて微笑んだ。その微笑みの情けなさといったら・・・・・・
２人が出て行こうとすると、店員が奇妙なことを言った。
「納豆はいらないんですか？」
あまりにも奇妙すぎる言葉に戸惑う２人に見かねた店員はため息をついた。店員が着ている長袖の制服からボタボタと何かが糸を引きながら落ちていく。その物体の臭いと色は、まさしく納豆だった。この店員、何か変だ・・・・・・亮がそう思った瞬間、店員の胸が大きく破裂し、肉片が顔に付いたと思ったらそれも納豆だった。店員が立っていた場所には納豆が集まった人間のような姿をしたものがネバネバと足を引きずっていた。
「何だよこいつ？ホラーかよ！！」
海が驚く様子もクールなことに亮はイラッときた。もうちょっとこう・・「ギャー！！」とか・・・・・・気づくと亮の目の前に納豆お化けがいた。海が恐怖に引きつった微笑みで亮を見ている。
「ギャアアアア！！！」
その叫び声は亮が海に望んだ叫び声よりも大きく、そして「ア」の数が多かった。納豆お化けは手か前足かよく分からないものを亮の肩に置き、身体の方に引き寄せた。そのとき、亮の耳元で何かが擦れた。砂色をしたその物体は、納豆お化けを亮から引き離し、コンビニの奥まで押し進んだ。物体が納豆お化けを押す力をなくし、地面に落ちる姿はまさしく砂そのもの。よく分からないが助かった２

人が後ろを振り向くと、シルクハットを被った若い男が眉をひそめて立っていた。若いと言っても２０くらいで、１７５ｃｍくらいはあるだろう。スラリとした体格を持つ男は、亮の肩に引っ付いた納豆の粒を払いのけながら言った。
「君たちはガーディアンだね？」

第2話；がんばれ悪臭男（前書き）

ガーディアンとは何なのか？
納豆は何なのか？
亮の妙なテンションは何なのか？

第2話；がんばれ悪臭男

「ガーディアン！？」
珍しく亮と海が口を揃えた。一体何年ぶりだろうか。小学校のときから一緒だった2人が口を合わせたときは今でも覚えている。確か、あの「じゅげむ」を朗読したときに2人の声が見事に合わさり、それはそれは1人の人間が喋っているように聞こえましたとさ。そんな場合じゃないことは亮でも分かった。いくらテストで１９０点取ったとしても、１００円を落として気持ち悪い体勢になったとしてもそういうことは分かった。
「ガーディアンってなんだよ？」
亮が質問をしている間にもあの納豆は起き上がって再び足を進めている。奴の足やら背中には列を乱したおにぎりやパンが引っ付いている。納豆ってすごいなと思った海であった。
「ガーディアンというのは、自然の力を駆使して様々な組織と戦う種族だ」
男の滑らかながらもハッキリとしたボイスにウットリしているヒマはなかった。あと1分ほど聞いていたら眠りについていただろう。それほど優しくて聞き手を包み込んでくれるような声なのだ。そんなこんなで遂に納豆野郎はコンビニの入り口まで来てしまった。ゾンビのような足取りで近づいてくる怪物に気づいた男は、さっきのようにどこからともなく砂を出し、無残にも納豆はまたコンビニの奥まで戻されてしまった。
「ああ、だからあんたは砂であの納豆を攻撃してんのか」
もはや亮にはさきほどの恐怖は微塵も無かった。頼もしい味方をもったからだろうが、海も心のどこかで安心していた。
「そう、僕は大地のガーディアン、スナチ＝ロックだ」
男の名前はロックだそうだ。見た目は完璧に日本人だが、名前がカタカナなのはどういうことなのか。しかしロックという名前が似合

っていることは確かだ。海がコンビニに目を向けると、ゆっくりと立ち上がろうとしている納豆野郎が目に入った。あいつが俺たちを攻撃してこなくて、納豆じゃなかったら涙を流しながら応援したい。そして見事こっちまでたどり着けたら壮大な拍手を送りたい。

「なんか、カッコいいなそれ」

なんかカッコいいとか言っている幼馴染がもう板チョコを食べ始めていることに気づいた。チョコを覆っていたカバーと銀紙は彼らがいる駐車場の上にまるでお供えのように整列して置かれている。環境破壊の元凶が、ここにいた。いますぐにでもゴミを亮の口に押し詰めたいが、そういうわけにはいかない。銀紙を噛むと歯が大変なことになるからだ。

「自然を使うってのがいいな！！」

亮の目は輝いている。目の前に大地を操る超能力青年がいるのに驚いていないのはバカだから成し得ることができる業か。

「まったく、あいつもしつこいな・・・・・」

ロックは呆れ顔でコンビニを出た納豆野郎を見た。また砂を出すつもりらしい。海はまってくれと言いたかったが、その必要は無かったようだ。砂が津波のように納豆野郎を飲み込もうとしたとき、納豆がアスリート顔負けの空中一回転を披露し、空を飲み込んだ砂はコンビニを砂まみれにして消えた。スタッと華麗に着地した納豆野郎は、よく分からないがVサインをしているような気がした。

「何度も喰らうかボケエエ！！」

喋れたのかあー！！！

海は驚くと同時に興奮を覚えた。亮もなんか「ウオッホホ～イ」とかゴリラが妙にテンションを上げているときの雄叫びのようなものを呟いている。

「俺は天下のポトルス幹部、納豆なくそう号1じゃあ！！」

なんじゃそりゃあ～！！

あの納豆が喋るたびに突っ込まざるを得なくなった海は一度深呼吸をした。よし・・・まず整理をしよう。納豆なくそう号1はあいつ

の名前だろ？ポトルスってなんだよ・・・・・
「ポトルスって何ですか？」
ここで初めてロックに話しかけたが、亮とは違って敬語を使った。いくら親しくても人生の先輩には敬語を使うというのは海のポリシーだ。
「ポトルスというのは、今ガーディアンが相手をしている組織だ」
そうらしい。まるでヒーロー番組のような感じになっているが、現実世界だ。ていうか、夢なら早く覚めてくれ。
「くらえ！！」
納豆が右手を伸ばして飛ばしたのは、砲弾ぐらいある納豆の塊。ダメージはないだろうが、あの納豆が体に直撃したときの不快感は考えたくない。
「ド・サンスウォール！！」
海たちの前の地面がえぐれ、ロックよりも高い壁が出現した。海が見たのはコンクリートでできた真っ黒な地面に白い線。そのまんま駐車場だが・・・・・・
「ちなみに、さっきの技名は『サンド』の『ド』の位置をずらしただけだ！！」
ロックは目を輝かせている。だが、そんなネーミング設定など知ったことじゃなかった。かなりどうでもよかった。ていうか、この駐車場とかコンビニとかどうすんだよ・・・・・

第2話；がんばれ悪臭男（後書き）

よかったら感想書いていってください。参考にしたりかなり落ち込んだりします。

第3話：短気な炎（前書き）

寒いです。この小説の人気は大変ほどないようですが、それでもがんばっていきます。

第3話：短気な炎

「ちくしょう！！」
コンクリートの壁の向こうで納豆が叫ぶ。よほど悔しかったようだが、別に攻撃を喰らってもネバネバするだけだろう。亮はまたパキリと板チョコをほうばった。
「はあ、ケリをつけるぞ」
ロックのため息は何だったのか。しかしそんなことを考える間もなくコンクリートの壁は元の位置に戻り、ロックは右手を突き出した。
「メテオ・ストーン！！」
今度は後ろの地面がえぐれ、拳ほどの岩が3つほど宙に浮いている様子を見てしまった。最初は幽霊かと思った。いやマジで。だって暗闇の中に茶色い物体が浮いているんだぜ？今9時だぜ？誰に向けて喋っているのか分からない亮の呟きは、「」が無いから心の中で思ったことにしよう。その亮が幽霊と間違えた岩はまっすぐに納豆へ飛んでいく。全ての岩が納豆に命中したのだが、なぜか納豆は叫んだりはしない。即死とか・・・・・・海がそう思った瞬間、3つの岩がズブズブと納豆の体にめり込んでいく。いや・・・取り込まれているのか・・・？まあよくわからないが、とりあえず岩が納豆の体に完全に入り込んでから海は自覚した。コイツ・・・強い・・・かも・・・・・？それもよく分からなかった。攻撃は弱いのに、なんか強い。防御だけだが。
「おし、もうキレた！！」
と納豆が言おうとしたが、遂に亮が痺れを切らした。
「うっっっっせーんだよてめええ！！」
亮がパンチを繰り出そうとしたとき、拳が熱くなるのを感じた。ていうか、熱い。普通に熱い。亮がグーの形になっている右手を見ると、なんか大変なことになっていた。・・・燃えてるよ・・・なんか熱いと思ってたら燃えてたよ・・・・

「ぎゃあああ！！」
1日で2回も叫んだのはおそらく今日で初めてだろう。いや、納豆が生きてたり手から火が出たらみんな驚くだろうよ・・・亮は実際その場にいないはずの第三者の声に反論をした。当然、そのにいないのだから第三者には聞こえない。
「亮！それがガーディアンの力だ！！」
ロックが手をメガホン代わりにして叫んだ。実際距離は5mほどしかない。まあ、炎を消す方法も分からないのでとりあえず怒りに任せて燃えさかる手で納豆野郎を殴る。効果は絶大だった。納豆に火が燃え移り、頭を燃やしながらコンビニの中へゴールインしてしまう。納豆はそのまま燃え尽きてしまうのだが、案の定その火は他のものにまで燃えうつり、3人が唖然としている中コンビニは紅蓮の炎に包まれた。
「に・・・逃げるぞ・・・！！」
ロックがそう言ったころにはもう亮と海は走り始めていた。

第3話：短気な炎（後書き）

まあこちらのほうもどうぞ

ｈｔｔｐ：／／ｔａｋｕｔｏｙｕｓａｋｕ．ｂｌｏｇ１０４．ｆｃ２．ｃｏｍ／

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2256d/

ガーディアン

2010年10月20日07時30分発行